

2000年夏の学校「STSによる21世紀の批判的構想」ご案内	p.02
STS Network Japan 2000 春のシンポジウム 『エネルギー政策をリスク論から考える － JCO 臨界事故の再検証と「不安」の評価－』報告	p.03
シンポジウムに参加して	p.06
代表就任の挨拶	p.08
事務局移転のお知らせ	p.08
科学技術への市民参加を考える会について	p.09
STS情報	p.09
総会報告	p.21

NEWS LETTER

2000 Vol.11 No.2

STS NETWORK JAPAN

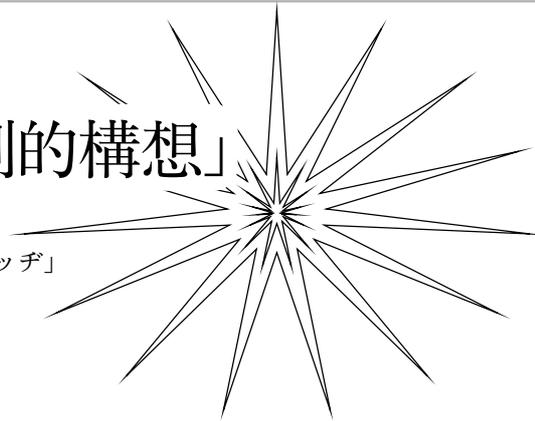
STSは、 Science, Technology, and Society の略称です

2000年 夏の学校

「STSによる21世紀の批判的構想」

期間: 2000年7月29日(土)～31日(月)

会場: クラブセント・ビレッヂ内「アネックス・セントビレッヂ」



<<http://www.stvillage.com/annex.html>>

〒401-0301 山梨県南都留郡河口湖町大橋通り1636-1

tel: 0555-72-0827 (午後9時以降はご遠慮下さい)

fax: 0555-73-1654 (24時間可)

e-mail: master@stvillage.com (24時間可、翌日返答)

アクセス: 富士急行線河口湖駅下車徒歩15分、送迎5分

予算: 二泊参加の方15000円 (29日の夕食、30日の朝・昼・夕食、31日の朝食)

一泊参加の方7000円 (いずれの日かの夕食、次の日の朝食)

今年も初夏に「夏の学校」を開催いたします。

今年は2000年であり、20世紀最後の節目の年です。

そこで今回のテーマも「STSによる21世紀の批判的構想」といたしました。

このもとで21世紀の日本を展望するような、幅の広い議論をおこなっていきたくて考えております。

まず議論の出発点として首相諮問機関『「21世紀日本の構想」懇談会』の報告書(※)を念頭に置き、その上で21世紀の科学技術と社会に関係のありそうなテーマ(大学(教育)改革やポスト冷戦型科学、遺伝子技術、IT、グローバリゼーション等)に関して講演者にSTS的な視点から、この報告書に対する建設的な批判を交えた問題提起をしていただきます。そして、それらを総合して討論していきたくて考えております。

このため現在の科学技術と社会に関わる問題に関心のある方であれば、どなたでも意義のあるものになると考えております。

今回は河口湖畔にあるクラブセントビレッヂというペンションの別館である「アネックス・セントビレッヂ」で開催いたします。夏の学校の参加者だけでこの建物を使用するため、より充実した時間を過ごすことができると考えております。

申し込みスケジュールなどは、下記のとおりとなっております。

夏の学校は多様な分野に問題意識を持つNJ会員が集まり、その問題意識を気軽に議論し合える数少ない場です。

もちろんNJ会員以外の方の参加も歓迎いたします。皆さま奮ってご参加ください。

(※ この報告書は首相官邸のページ<<http://www.kantei.go.jp/jp/21century/>>で閲覧できます。

あるいは講談社からも河合隼雄監修『日本のフロンティアは日本の中にある—自立と協治で築く新世紀』として出版されています。)

1) 発表者(とテーマ)受付 締め切り6月15日(木)

(とりあえず資料だけほしいという方は、この日までに申込書の「プログラムを送ってください」に丸をつけて送付してください)

2) 参加最終締め切り7月1日(発表のない方はこの日までであれば参加可能です)

3) 問い合わせ先 STSNJ夏の学校実行委員長 夏目賢一 (PHS: 070-5064-0922 / e-mail: office@stsnj.org)

申し込み先 STS Network Japan 事務局

〒153-8902 東京都目黒区駒場3-8-1 東京大学大学院総合文化研究科

藤垣研究室気付(15号館707号室)

fax: 03-5454-6990 e-mail: office@stsnj.org

『エネルギー政策をリスク論から考える

－ JCO 臨界事故の再検証と「不安」の評価－』報告

春日 匠 (京都大学)

skasuga@mars.dti.ne.jp

日時：3月26日(日) 13:00-17:00 (開場12:30)

会場：東京大学先端科学技術研究センター新4号館2階講堂

パネラー：

飯田哲也氏 (日本総合研究所)

池田三郎氏 (筑波大学社会工学系)

林衛氏 (岩波書店『科学』編集部)

浅見恵司氏・重松真由美氏 (東京工業大学)

コメンテーター：

野村元成氏 (信州大)、平川秀幸氏 (ICU)

1.

2000年3月26日に行われたSTS network Japan春のシンポジウム『エネルギー政策をリスク論から考える：JCO臨界事故の再検証と「不安」の評価』は約60名の参加者を数え、おそらくSTSNJのシンポジウムとしては過去最高規模の参加者を集めた。この中には、日常的な参加者である研究者、中高の教員、関係省庁の官僚といった人々のみでなく、広く大学の学部生、メディアや市民運動関係の方と見られる人々もあり、この意味でもSTSNJの活動の幅を広げられたことと思う。なにより、常盤大の松原さんのご尽力もあり、東海村からわざわざ駆けつけてくださった方々の貴重なご意見を伺えたことは最大の成果の一つであった。東海村からの参加者の方々の感想も本ニューズレターに掲載することができた。こうした形で多様な意見を集積させ、論点を洗い出すことは本ネットワークにとって極めて重要な役割であるので、今後のご意見などをお寄せいただければニューズレターなどで取り上げていきたいと考えている。

なお、筆者のここでの役割はシンポジウムの報告ということになるが、当日の講演そのものについては、テープをおこしたものが今年度に発刊予定のイヤーブックに掲載予定であるので、ここでは概要を示すにとどめ、このシンポジウムまでの経緯と当日の論点についての報告をさせていただくこととする。一つには各講演者の論点が極めて多岐にわたり、またそれぞれの論点について短い時間で言葉を尽くしてくださったので、ここで問題について精通しているわけでもない筆者が問題を安易に解説することで思わぬ誤解を与えることを恐れるためである。特に飯田氏については『北欧のエネルギーデモクラシー』（飯田哲也2000新評論）という労作を発表されたばかりであり、そちらも併せてご参照いただきたい。

99年9月の東海村におけるJCO臨界事故は日本初の臨界事故であり、しかもそれが民間施設で、必ずしも専門的知識が十分といえない作業員による作業中に行われたという点で衝撃的な出来事であった。また、当初はこの作業に従事した作業員がマニュアルの手順を無視したことが原因であると見られていたが、結果的には会社や国が作業の効率化のためにマニュアルを無視することを事実上マニュアル化していたことが発覚し、ずさんな管理体制を露呈した。

また、事故直後の関係機関の対応もかみ合わない側面もあり、地域住民をはじめとする人々の不安をあおるものであった点も批判される。ただ、関係省庁の情報開示はこれまでの事故に比べ迅速であった[# これまでは国の機関の事故であったが、今回は民間企業の事故であったという事実が大きいと思われるが...]。ただし、特に大手マスコミ各社はこれを十分に生かし切れたとはいえず、特に事故の規模の評価や水蒸気爆発の有無などの深刻な情報について、海外メディアの先走り（結果的には一部誤報があったと思われる）と

----- 切り取り線 -----

STS Network Japan 夏の学校 参加申し込み用紙

STSNJ夏の学校2000に (参加します。/プログラムを送ってください) *

氏名 (フリガナ) 性別 (男・女) *

連絡先 (所属先・自宅・e-mail) *

e-mail アドレス ()

所属先：〒

tel:

fax:

自宅住所：〒

tel:

fax:

発表 (する・しない) *

発表される方のみ 講演題目 ()

*いずれかに○印をしてください

複数必要な方はコピーしてお使いください。e-mailでの申し込みも同様の書式をお願いします。

国内メディアの沈黙の間で、情報の欠乏に悩んだ人々も多かったと思う。今回のシンポジウムでは扱われなかったが、このマスメディアの情報不足を事実上補ったのがインターネットで、いくつかの有名掲示板などで専門用語に関する質疑応答やメディアの速報に関する解説などが頻繁に行われた。インターネット情報の真偽を判断する責任が受け手側にそのまま課される点に強い問題を孕むとはいえ、今回のような事故のさいのネットワークの重要性が再確認される形となったのも確かである。また皮肉なことながら、この機会に原子力資料情報室 <<http://www.jca.ax.apc.org/cnic/>> などの市民運動系情報の重要性を再確認したり初めて認知した国民も多かったのではないだろうか。

さて、わが STS Network Japan の会員の間でも事故直後からメーリングリストや私信、時には電話などで活発な議論が行われた。Network Japan 会員の間でこの時間問題になったのは、事実の把握の重要性もさることながら、目の前で「おそらく（自分にとって／社会にとって）とてつもなく重要なことが起きているのに」それについての十分な情報がなく、あるいはあまりに真偽を判断し得ず、かつ重要性や情報量に比して主体的に行える対処法の選択肢があまりにも少なく、また個々の選択肢が無力であるという事実はどう対処するかという問題であった[まあ、今考えるとそうだったってことで、当時はもっと混乱していたのだが…。これには、一部で東海村の住民や作物が被った「風評被害」にどう対処するか、といった問題も含まれるだろう。そのような経緯で、STS Network Japan としての事件への対処として、2000年春のシンポジウムでこの問題に対処することが決まったわけだが、その中心的な課題として、社会がリスクを認知し、それへの対応を決定していくさいのコミュニケーション、いわゆるリスク・コミュニケーションの問題としてこの事件を扱うという焦点が決定された。JCO事故の再検証を唱ったシンポジウムや研究会は大は朝日新聞主催の『21世紀のエネルギー選択』（1月25日）から身近なところでは京都女子大の特別講座（10月16日）、「科学・技術と社会の会」の定例会（11月11日）など、数多く見られたが、リスク問題というメタな視点を提示することで、NJの役割を明確にできるかと考えた次第である。

2.

かくて、2000年春のシンポジウムは「原子力」という、科学・技術を巡る問題群のなかで最もホットで論争的な事象の一つを扱うことになった。題して『エネルギー政策をリスク論から考える：JCO臨界事故の再検証と「不安」の評価』（3月26日 於東京大学先端科学技術研究センター）である。

最初のパネラーは年末以降シンポジウムやマスコミに突っ張りの飯田哲也氏である。飯田氏は日本総研主任研究員兼スウェーデンのルンド大客員研究員であり、かつ自然エネルギーの促進、普及につとめる市民運動にも携わってこられた。さらにシンポジウムにあらわれた氏には「自然エネルギー・コム」 <<http://www.greenenergy-j.com/>> 代

表取締役社長という新たな肩書きが加わっており、企画者一同度肝を抜かれた。まさに八面六臂の大活躍中である。

飯田氏の発表は主にポスト原子力は可能か、というテーマに収れんした。実は、JCO事故について相当量の議論を用意して下さっていたのだが、これについては時間の都合等もあり、会場ではあまり聞くことができなかった。

ただし、原子力を考える以上、政策論やリスク論の様相を帯びるのはもちろんである。飯田氏が最も重視した論点は、氏の言葉で「エネルギー政策の立体化」というものである。冷戦期の原子力は国家規模のビッグ・プロジェクトであり、エネルギー政策というのは中央省庁の専権事項であった。そうした体制は近年、エネルギー危機や環境問題、市民運動の強化など様々な理由から解体され、分散している。この状況を「政府」「市場」「地域」の三要素に分け、現在主導的な地位にいる北欧の事例などから分析した。たとえば、「政府」要素として、環境負荷の少ない自然エネルギー導入を図るため、化石燃料に課税したり、エネルギー供給が右肩下がりである程度の経済成長を維持するようなプランが立案されると言うことがある。また、「市場」要素として、電力の販売が自由化されると、膨大な発電量を常時維持しなければならない原発は電力価格が極めて安い早朝などにも販売をやめられず、一方で比較的コントロールが容易な風力などは電力価格が高い時間帯に集中的に発電できるため、管理コストなどの面で有利であるという側面が指摘された。また、現状では自然エネルギーは若干割高でも、そのぶんの追加コストを払った人には「グリーン証書」と呼ばれるその旨の証明書を発行するなどして付加価値をつけ、市場競争力を強化すると言った方策も紹介された。

北欧をはじめとする世界のこういった状況に比して、我が国では決定プロセスは不透明で非民主的であるという。ただ、国会内に自然エネルギー促進連盟が結成され、超党派で約260名の議員が参加していることや、審議会などで飯田氏自身を始めとするNPO関係者も発言が求められる現状も紹介された。

飯田氏の論調は、基本的にはこういったダウンサイジングと決定プロセスの自由化、民主化によって現在の巨大プロジェクトとしての発電が抱え込んでしまっている病理を克服できるし、するべきだ、というものであった。エネルギー問題というと、巨大原発を造るか、テレビやオーディオの待機電力をちまちまと節約するか、というあまり心楽しくない選択肢しか示されていない我々日本人にとっては、かなり未来に希望が持てる見解であるには違いない。ただし、すべての地域でこういったダウンサイジングや民主化がうまくいくためには、克服すべき技術的、政策的課題が多々あることは論を待たない。自然エネルギー体制の確立は現在過疎化して、それこそ原発誘致でしか産業を興せないような地域が主体的なコントロールに置くことのできる代替政策であるとは言えそうであるが、それが「すべての」過疎化地域に当てはまるとは限らないだろう。また、こういった楽観性が今流行の単純な市場主義と自己責任論に還元されてしまうことの危険も指摘されなければならないだろう。

次に、日本リスク研究学会の池田三郎氏にご講演いただいた。池田氏は、今後、エネルギー政策もリスク論の重要な課題であるが、まだリスク論自体が新しい学問分野であることもあり、これまでのところ十分な研究が行われていない点を指摘した。

リスク論という言葉は一般にはまだまだ馴染みのない言葉だと考えられるが、STS関係者には重要な言葉になりつつあるだろう。簡単に述べれば、これまでの実証主義的なリスク研究が定量的に「計測可能」なリスクの問題に焦点を当て、一般の漠然とした「不安」を心理的バイアスに起因する「非合理」と退けてきた。これに対し、「予防原則」「生産者危険」などの概念設定から議論をおこし、（これまでは技術やプロジェクトの単なる受益者とされてきた）一般の人々の認知をくみ取る中からこれまでは見過ごされてきたようなリスクの存在を洗い出していこうというのが新しいタイプのリスク論である。

池田氏は大まかに事象を「結果予測の確実性」と「望ましくない結果についてのコンセンサス」の二つの要素で四つに切り分けて、それらがそろっているときに初めて定量的なリスク計測が可能で、それらが原理的に難しいときにリスク論的知見が有効性を増すと論じられた。また、リスク事象の性格を確率と被害の大きさを「大、小、未知」に場合分けすると、対処法を含めておおむねギリシャ神話にその類型が見られるというドイツのリスク論学者Rennの指摘は、歴史という意味でも認識論という意味でも興味深く、それらの分野における実践的な研究の必要性を示唆するものだろう。

岩波『科学』編集部の林衛氏からは、核燃料サイクル開発機構の『わが国における高レベル放射性廃棄物地層処分の技術的信頼性』について、北米などの安定大陸の中で「安定している」とこと、変動帯に位置する日本の中で「安定している」ということ、まったくスパンの違う安定性が混同されているなどの「ごまかし」ともとれる広報の問題点が指摘された。「この資料を一般の読者がどう解釈するだろうか」という観点からの考察は、一線メディアに関わる編集者ならではの鋭い指摘であるかもしれない。

また、こういった議論に参加しようとすると、膨大に刊行されている資料を「読んでから来てください」という形で門前払いされてしまうことの問題点も指摘された。

ここで林氏が強調したのが、事実関係の追求の甘さにもまして、行政側が企画するイベントが、司会者やゲストに「始まる前は不安でしたが、だいぶ安心してきました」と語らせるなど、説得型のコミュニケーションの戦略がとられていることの危険である。つまるところ、イベントに「不安を抱えたしろと layperson」が参加していたら、その人を説得するのではなく、その人が代表するであろう「世間一般」の抱える「不安」を洗い出し、政策や科学に還元するようなコミュニケーションが求められているのである。この意味で、ここでも重要なのは「説得型のコミュニケーション」からリスク・コミュニケーションへの移行であると論じられた。

また、東工大の学部生であり、今回の事故に関して鋭い

問題意識を持って、現地での聞き取り調査にも参加することになった浅見恵司氏と重松真由美氏から、現地を見た率直な感想を聞くことができた。村の施設や道路などが妙に立派であった点、「ようこそ原子力の町東海村へ」といった看板から「原子力の」の部分が消された、不安を感じているがそれを表に出すことにためらいを感じる人々がいた、などの報告は迫真的であった。しかし、質疑応答の段階では、東海村からの参加者からの、そういった報道も多々見られたが、じっさい自分の周りでそんなことを言っている人は居なくて、そういった話を誰に聞いたのか理解できない、という指摘もなされた。このあたりは観察者側ないし現地側に先入観があるのか、あるいはインタビュー対象が偏っているのか、もしくは「議論」や「雰囲気」などで指し示す対象が違うのか、今後考察する必要があるだろう。

最後に、STSNJのメンバーから、野村元成氏（信州大）と平川秀幸氏（ICU）が総括のコメントを行った。…といたいところであるが、長く原子力の問題を追求している野村氏からは、もんじゅ訴訟結果の問題点についての解説があり、アメリカ視察から帰ったばかりの平川氏からはアメリカの行政や審議会システムについての報告と日米の問題点の指摘があり、まとめと言うよりは論点の拡大が行われた。論点の洗い出しというSTSNJのシンポジウムの趣旨にはかなうものの、司会は大弱りである。

コメントの主要な論点として平川氏が、「予防原則」がこれまで政治的な主体的参加を奪われてきた人々のエンパワメントの道具として使える点が指摘されたことをあげられよう。ただし、池田氏はそのあと平川氏の議論や「開発者側に責任を負わせるような予防原則」という考え方が、安易に「非合理性」の許容になることへの危機感を表明した。今後議論が必要な点である。

このあたりは筆者としては（会場では諸般の事情で（笑）コメントしそこねたのだが）、厳密に言えば問題を議論の対象にする（アジェンダ・セッティング）の段階、議論の段階、コンセンサス形成の段階における方法論を吟味することで回避できるものではないかと思われる。逆に言えば、リスク・コミュニケーションが、池田氏の言うように1) 専門家が見落としてしまう論点を見つけだすことや、2) 政策家や学者は集団としてのリスクや利益に目がいきがちだが、リスク・コミュニケーションによって個人や下位集団の隠蔽された利益を洗い出すことと、「しろと」のエンパワメントすることが接合している限りにおいてその議論は十分な「合理性」を持つのであり、「合理／非合理」といった先験的な区分を設定する必要はなく、むしろそういったことは有害である、と論じることができよう。[#このあたり、まず池田氏の講演をいただいて基礎的な概念を詰めてから、エネルギー政策に関する問題が現状でどの程度克服されるかを、飯田氏の講演を伺いながら検証する、というのが穏当な手順であったかもしれない。事務局として若干の反省を感じるしだいである。]

主催者側が「まとめる」ことを放棄しているにもかかわらず（あるいは放棄しているからこそ？）質疑応答については会場から積極的な参加が見られた。特に、概念装置と

して「認知が原理的に不可能あるいはごく困難なリスク」を「対象化」する「科学」というのはいろいろな意味で語義矛盾ではないか、といった理論レベルの質問から、東海村からの参加者の、当事者でもないものが当事者を代弁することに対する違和感といらだちの表明まで、極めて多岐に富む点が、今回のシンポジウムの特徴であろう。

簡単にまとめると、

・決定プロセスの民主化、ダウンサイジングによる政治への一般参加をたやすこととその問題。

・リスク・コミュニケーション、不確実性の必要性和「不当なもの」をどう切り分けるかのバランスの問題、あるいは知の正当性やチェックアンドバランスの維持の問題。

・現地の当事者と専門家など、多様な利益を持つ関係者がどう対話するか。

などの問題が、相互に絡み合いつつ提示された、ということになるだろう。このあたり、昨年の春のシンポジウム『グローバル・サイエンス、ナショナル・サイエンス、ローカル・サイエンス』や『工学教育改革とSTSの可能性』などとも絡み合いつつ、それらに比べて極めて実践的な議論ができたかと思う。これまでとはいささか毛色が変わった、何度か強調しているように極めて論争的なテーマであることもあって、パネラーのみなさまや実際の準備を指揮した夏目さんなどには多大な苦労があったことと思うが、今後もこういった挑戦的なシンポジウムを試みるべきであるという確信も得られた。

最後になりますが、パネラーのみなさま、会場にいらっしやっただみなさま（特に東海村からの参加者の方やマスコミ、省庁関係の方など）に多大な感謝を表明し、不十分ではありますが報告に代えたいと思います。

シンポジウムに参加して

川井秀樹（常磐大学 国際学部）

会場に到着して感じた事があります。会場に着いてすぐに、松原氏が「東海村の住人」だということ、周りの人達の目と、雰囲気が一瞬にして変わった気がします。

発表が始まり、その発表を聞き始めてから、理解できる内容がほとんどありませんでした。内容的には理解出来なくもない部分もあったのかも知れませんが、専門用語らしき言葉が数多くでてきたので、出てきた時点で話がわからなくなってしまったというのが正直なところです。

今回開かれたシンポジウムは、本当ならば一般の人達にも聞いて欲しいという事らしいのですが、内容は専門の人達を対象としているとの事でした。それを聞いて「分からなかったのも仕方がなかったのかな？」と思いました。

今回のシンポジウムの開催趣旨には、「JCOの事故を機に、原子力に依存し続ける国のエネルギー政策について、それから事故以来、多くの人々が抱いている不安について、そしてこのエネルギー政策を改善していくものとして、エネルギー源を原子力以外の様々なエネルギーに分散させ、それをネットワーク的に管理していく方法が検討されている」とありました。発表された先生方は、原子力は無くすべきだと言われましたが、私は「それは無理だろう」と思います。原子力発電が、全発電量の何パーセントを占めているのかは良く知らないのですが、原子力発電を廃止するという事は、それに代わる電力の生産手段を確保しない限り、原子力発電がまかなっていた電力量を使うことが出来なくなるという事でしょう。それが不可能なのではないかと思うのです。新しい発電手段を確保するか、今使われている電力量を減らすか、それが出来なければ不可能でしょう。

私は東海村の人間ですが、実は、脱原発、原子力推進、どちらでもありません。それは、私を含め多くの東海村民がそうであるように、どうしても原子力じゃなければいけないと言う考えではないのです。むしろ、原子力に頼らずに済むのなら、原子力など無くなった方が良いと思っています。原子力に代わる手段があるのならそれの方が良いと思うのは当然です。もし私が強く脱原子力の考えを持っていたとしたら、それに代わる発電の手段を確立させ、誰もがその方が良いと思わせられるもの、まずそれを考えます。確かに東海村の住人は、住民税が比較的安いなどといわれるように、原子力の恩恵を受けているかもしれませんが、あまりその実感はありません。

今回のシンポジウムを聞いて一番強く思ったのは、シンポジウムの中で発表された内容を、「もっと分かりやすく、もっと数多くの一般の人々に聞いてもらえばいいのに」と思いました。東海村の現役高校生を同行させたのですが、全く話がわからず、「不安や不満があっても言い出せる雰囲気ではない」などの東海村の印象に対して、反感を持っただけのようでした。私も少なからず反感を持った

STSNJメーリングリスト

のお知らせ

STSNJ Network Japanでは、会員のみ参加いただけるSTSNJメーリングリストをご用意しています。

情報交換や議論に、幅広くご利用ください。

登録を希望されるかたは、事前に登録してあるアドレスで、調 <shirabe@cinfnt.shinshu-u.ac.jp> までメールをお送りください。会員の方であるか確認ののち、手動で登録いたします（しばらくお時間をいただくこともあります）。

また、登録メールアドレスの変更は事務局 <office@stsnj.org> までお願いいたします。

のは事実です。

最後に、今回のようなシンポジウムを、東海村で開催していただけるように強く希望します。東海村民がどのような反応を見せるのか、非常に興味深いのは私だけではないと思います。そしてもし開かれるのであれば、東海村民を唸らせるような、内容の濃いものになるように、期待しています。

菊地絵里

今回のシンポジウムに参加して私が思った事。それは、何を言っているのか全然分からなかった事。難しい言葉だらけで、理解不能でした。私がわかった事といえば、原子力は無くさなければいけないとどなたかがおっしゃった事と、皆さんは話すのが非常に速いという事だけでした。

私は東海村に住んでいます。私が生まれたときには、もう当然のこのように原子力発電所がありました。そのことに対して私は嫌だと感じたことはありません。逆にすごい村なんだと誇りに思っています。確かに、原子力は危険だし、事故がおきたら大変かもしれませんが、生まれてからずっと私の生活が豊かなのも、東海村のおかげだと思っています。それに沢山の人が原子力で作った電気を使っています。だから、「あんまり非難はして欲しくないな」と思っています。

今回のシンポジウムを聞いていて、私は何度も嫌な気分になりました。東海村について、「原子力について住民は何もいえない雰囲気がある」とおっしゃっていましたが、どこを見て思ったのか私にはいまだに分かりません。他にも色々な発言がありましたが、新聞の集計結果を見るだけでなく、東海村に来て自分の目と耳で確かめてほしいと思いました。

もしこのような話し合いを一般の人達を対象としてやる時は、難しいかもしれませんが、分かり易い言葉を使って話してください。わからない言葉は、不安や心配につながると思います。自分の理解できる言葉で話をしてくれたら、とても安心できると思います。

「原子力を無くさなければいけない」と思っているのなら、原子力の欠点を研究するのではなく、原子力に代わる発電方法をまず考えなければいけないと思いました。永久になくならない、危険ではない発電方法が見つかるのにと、強く感じました。

●編集委員からのお願い●

会員の皆様には、各種情報をお寄せくださるようお願いいたします。特に、会員の皆様の関わられた出版物、報告書の情報をお知らせください。また、会員消息の項目も充実させたいと思っておりますので、お知らせください。今回も多数の方々から情報を提供していただきました。ご協力どうも有り難うございました。

なお、情報は、事務局宛あるいは
skasuga@mars.dti.ne.jp

までお送りくださいますようお願い申し上げます。

<編集委員・春日 匠>

会費納入について

このニューズレターが入っていた封筒のラベルに関する説明

お名前の右下に、会費の支払い状況などを示しております。例えば、

「99,00未」と「00未」は、それぞれ該当年の会費（3500円）が支払われていないことを表します。前者に該当の方は、今年度中に会費のお支払いがなければ、それをもって脱会の意志表明と受け取らせていただき、以後Newsletterの発送を中止します。

「00不足」は、お支払いいただいている会費が3500円には不足しているもので、「不足」の後の数時が不足金額を表わします。お手数ですが差額分お支払いください。

「臨時」は、「夏の学校」への参加者など、何らかの理由でSTS Network Japanに関係がある方に、臨時にお送りするものです。この期間は通常1年間です。送付が始まって1年以内に入会の手続きをとられなければ、以後Newsletterの送付を停止させていただきます。

STS Network Japan 公式ホームページ

STS Network Japanの公式ホームページアドレスが変更されました。

会員に向けた活動計画の迅速な告知と、非会員への活動内容の宣伝が当面の目標です。当面は、NLに掲載された記事などは極力掲載する予定です。NLに投稿される方は、あらかじめご了承下さい。

今年度は情報掲示板などもご用意しました。併せてご利用ください。

なお、当面管理は広報担当の春日がおこないます。ご意見は、事務局までいただければ幸いです。

URL: <http://stsnj.org/>

E-mail: office@stsnj.org

代表就任の挨拶

隠岐さや香

東京大学大学院博士課程
日本学術振興会特別研究員

冷戦の終焉と共に、STS Network Japanは10年前に産声をあげました。来るべき時代を見据えることを主眼に起き、堅苦しい「学術団体」ではなく、多様な人々から成る緩やかなネットワークの「場」として機能することをめざして、数々のシンポジウムや夏の学校などの催しを行い、リアルタイムで社会と科学を追いかけてきました。

1990年代はソ連の解体に始まり、アメリカンスタンダードという名の下カジノ経済が猛威を振るう中、国家、社会、家族などにおいて「普遍的」とみなされてきた近代的諸価値が動揺し、総点検を迫られた時代でした。特に、科学と社会の切り結ぶ地点に立つSTSNJは、冷戦型科学の民生転換に伴う光と影、バイオテクノロジーがもたらす倫理的問題、深刻化する環境問題など、ますます複雑さを増す現実が我々の前に累積していくのを目の当たりにしてきました。

そして、迫り来る21世紀、STSNJは何処へ向かうのでしょうか。「誰が、誰のために、何を発信するのか」ということを真剣に考えるべき地点にきています。結成から10年のうちに、STSに対する社会の認知度は高まり、STSNJも幅広い世代と多様な背景から成る会員の方々をお迎えするようになりました。この現状を受けて、関心を共有する研究団体との協力関係の模索などが提案されています。

これからの一年は社会と科学の望ましい姿、STSNJ自身のこれからのあり方、その両方について議論し、未来を構築するための大事な助走のステップとなるでしょう。そのために私も、STSNJの事務裏方として若手や先輩方と連携しつつ、皆様の積極的なご参加と、幅広い交流・対話を可能にする場の提供を心がけていく所存です。また、今後ともより一層効率的で透明性の高い運営を目指すため、調整機関である事務局を制度的に整備されたものにするお手伝いが出来ればと考えております。

いずれにせよ、常に皆様との対話・交流を第一に頑張っていきたいと思っておりますので、まだまだ至らぬ事の多い未熟者ではありますが、一年間、どうぞよろしく願いいたします。

事務局移転のお知らせ

会員の皆様へ

2000年5月より、STS Network Japanの事務局が下記の場所に移転いたします。また、それに伴い、インターネットホームページURL及び連絡先メールアドレスも変更されましたのでご注意ください。

新事務局住所：

〒153-8902

東京都目黒区駒場3-8-1 東京大学大学院総合文化研究科

広域科学専攻広域システム科学系

藤垣研究室気付（15号館707室）

FAX: 03-5454-6990 / メールアドレス: office@stsnj.org

URL: <<http://stsnj.org>>

科学技術への市民参加を考える会について

2000年4月21日 木場隆夫

標記の会がNPOとして発足して活動を始めました。1999年11月に東京電機大学においてその設立会合が行われました。会の略称はAJCOST(アジュコスト: Attentive Japanese Citizens on Science and Technology)です。

STS NJの皆様を参考として、この会の様子をお知らせします。というのは、1998年、1999年とコンセンサス会議を開催して、それについて本News Letterに投稿してきました。AJCOSTは、第二回目のコンセンサス会議(高度情報社会とくにインターネットを考える)に参加した市民パネルを中心とし、事務局と専門家も参加して発足した会なのです。コンセンサス会議などの科学技術を市民レベルで考える行動を社会に広めましょうという趣旨の会です。

とりあえずは、コンセンサス会議のような手法がありますよと、各種企業、地方公共団体などに普及していくことを考えています。

その活動は具体的には、

(1) 3カ月に一回位会合をもって、その後お酒を飲んで盛り上がる。(1月と4月に会合を東京電機大学神田校舎で開きました。)

(2) 第二回のコンセンサス会議の報告書を作成した。ご希望の方には一冊500円で頒布いたします。全260ページ余の力作です。お早めにご予約下さい。連絡先は東京電機大学の若松さんか、下記ホームページに掲載されているEメールアドレスまでお願いします。

(3) コンセンサス会議以外の科学技術と社会に関する考察方法の開発(現状は他で行われている方法の紹介にとどまっていますが。)

(4) 普及啓発活動

・見て楽しいホームページを作成しています。URLは以下です。一度ご覧になって下さい。

<http://www.ccs.dendai.ac.jp/~consensc/ajcost_tmp/top_frame.html>

・会報の作成 4月に第一号が出ました。会員の方及びご希望の方に配布します。

・リーフレットの作成・・・現在原稿を作っています。

・パンフレットの作成・・・構想中です。

AJCOSTは現在、会員数は30数名です。ユニークな人が多くて、結構、皆さん楽しんで会合に参加されています。あなたもAJCOSTに参加しませんか。これからのAJCOSTの活動を応援して下さい。

●STS情報●

●●開催案内●●

●「遺伝子組み換え作物の安全性に関する

STS的・リスク論的研究」第一回研究会

日時 6月24日 13:00より

場所 神戸大学国際文化学部 D校舎610教室

講師 大塚善樹氏(広島経済大学)

テキスト 「なぜ遺伝子組み換え作物は開発されたか
—バイオテクノロジーの社会学」、明石書店、1999年

問合せ 塚原東吾(神戸大学国際文化学部)

TEL: 078-803-7435

※このプロジェクトは今後、STS NJも後援して、シンポジウムなど開いていく予定です。

会員のみならずぜひご参加ください。

●東工大中島研究室公開セミナー 「先端科学技術と社会」
第38回研究会

科学技術の高度化は、それを受容する社会との間に、数々の解決すべき課題を提起しています。

本セミナーでは、この問題に関わる刺激的な話題の提供者をお招きし、定期的に研究会を開催しています。例会の第38回は、アメリカ・テキサス大学のビジネス倫理の大家として知られるソロモンさんにお話をいただきます。ビジネス倫理は技術倫理と共通する部分が多く、科学技術の将来を考える場合に大きな影響を与えてきました。そのような視点から、興味深いお話がうかがえるものと思います。ふるってご参加ください。

終了後は恒例の懇親会を開催いたします。

日時: 2000年6月7日(水) 18時30分~20時30分

内容: A Better Way to Think about Business

Robert C. Solomon

(Department of Philosophy, University of Texas, Austin)

会場: 東京工業大学百年記念館 第5会議室

東急目蒲線もしくは大井町線大岡山駅下車

世話人: 東京工業大学大学院社会理工学研究科

中島秀人・水沢光

東京大学先端科学技術研究センター 大谷卓史

連絡先: 〒152-8552 目黒区大岡山2-12-1

東京工業大学大学院社会理工学研究科 中島研究室

tel/fax 03-5734-3255 /e-mail nakajima@mail.me.titech.ac.jp

●東京大学 駒場研究センター 第12回 オープンハウス
第24回先端科学技術公開シンポジウム (学術講演会)

場所: 先端科学技術研究センター 4号館 講堂 (2F)

6月1日 (木) 13:00 開会の挨拶

先端科学技術研究センターセンター長 岡部 洋一

13:00-14:00人間の創造性を高める情報技術

先端科学技術研究センター教授 堀 浩一

14:00-15:00空間情報によるマルチメディアの新しい展開

空間情報科学研究センター助教授 有川 正俊

15:00-16:00半導体ナノテクノロジーと次世代エレクトロニクス
～21世紀を支える情報通信技術への展開～

先端科学技術研究センター教授 荒川 泰彦

6月2日 (金)

10:00-11:00 ゲノム情報科学と医療

先端科学技術研究センター助教授 油谷 浩幸

11:00-12:00生命科学研究のシビリアンコントロールは可能か
～ヒトゲノム・ヒトクローン・遺伝子組み替え技術の応用
化をめぐる～

先端科学技術研究センター客員教授 米本 昌平

13:00-14:00電子商取引の発展に向けて: インターネット上の
決済手段としての電子マネー

先端経済工学研究センター・次世代電子商取引分野
助教授 中山 靖司

14:00-15:00科学技術政策の動向 (次期科学技術基本計画の策
定と行政改革を中心に)

国際・産学共同研究センター客員教授 結城 章夫

●「湘南科学史懇話会」、「科学と社会を考える土曜講座」
の共同主催の研究会のご案内。

1.日時:2000年6月24日(土)午後2:00~5:00。

2.場所:東京大学教養学部駒場キャンパス、14号館208号室、連
絡先:03-5454-6135

3.講演者:清水宏幸氏(仙台市、清水内科外科医院 主宰)

4.演題:「現代病と中医学」

5.講演要旨

西欧近代医学を見直すために、中国伝統医学との高いレ
ベルでの比較が要請されている。西洋医学がだめなら中国医学
があるさ、といった安易な姿勢ではなく、両者の批判的対
比、長所の結合が求められているのである。現代病といわれ
る肝硬変、自己免疫疾患、悪性腫瘍などに現実に対処してき
た経験をもとに、中国医学(中医学)、なぜ、いかに、どの程
度、有効かを現場の医師の立場から論じてみたい。同時に、
近代日本における「漢方」の墮落、医療行為の貧困などにつ
いても触れてみたい。さらに討論を通じて、現代の科学
論・技術論にも新たな光が照射できればと希望している。現
代医療について批判的に考えるヒントを提供したい。

参考文献:清水宏幸「中西医结合医療の理論-経験と理論に基づ
いた技術とは」

(特集:いま、科学の何が問われているか、『科学』(岩波書
店、1999年3月号)

6.参加費:無料

7.連絡先

猪野 修治 電話:046-269-8210、FAX:046-269-8213

上田 昌文 電話/FAX:045-532-1958

●科学史フォーラム

国際基督教大学キリスト教と文化研究所が開催する「科学
史フォーラム」の2000年度春学期公開講演会のプログラムが
届きましたので、ご案内します。3件あります。

<<http://subsite.icu.ac.jp/icc/>>

日時:5月12日(金) 4:10~5:40pm

場所:国際基督教大学 理学館 N-232

講演題目:新しいボイル像

講演者:吉本秀之 (東京外語大 助教授・科学史)

日時:6月2日(金) 1:10~2:40pm

場所:国際基督教大学 教育研究棟 257-259

講演題目:Gregory King's 1696 Estimates of English Wealth and
Population

講演者:Dr. John Taylor (Fulbright Visting Professor, ICU;
Professor of History)

日時:6月6日(火) 1:00~2:30pm

場所:国際基督教大学 教育研究棟 257-259 (会場変更の可能
性あり)

講演題目:産婆術と産婦人科学の歴史

講演者:小松真理子 (帝京大学 講師・科学史)

●●開催状況 (定例研究会) ●●

●科学技術社会論研究会

テーマ:科学技術社会論と科学教育

日時:2000年4月22日(土) 11時から18時

場所:東京大学先端科学研究センター
13号館2階セミナー室

今日、科学技術の教育に関しさまざまな問題が指摘されて
いる。「若者の理科離れ」「技術者への倫理教育の必要性」
などなど。学校教育を離れば、「一般の人々に科学技術に
関し何をどのように伝えていくのか(ジャーナリズムなども
含めて)」といった問題や、「地域に根差した価値観・自然
観と科学技術の教えるところとの間でどのように折り合いを
つけていくのか」といった問題もあろう。

そこで今回の研究会では、必ずしも「学校での教育」とい
う枠にとらわれず、広い意味での「教育」を対象にして、科
学史や科学哲学、科学社会学などの観点から、科学技術の教
育にまつわる諸問題をできるだけ原理的に考察してみたい。
また、教育の現場からの考察もまじえ、今日の科学技術社会
論が現実の問題とどのように切り結びうるのかについても考
えてみたい。(杉山)

杉山滋郎(北海道大学) 科学史と科学教育—その意味す
るところ

小川正賢(茨城大学) 科学教育の文化研究

隅田学(宮崎大学) 構成主義研究から見た「科学教育」
という文脈

右近修治(柏陽高校) 学校現場から「科学技術社会論」

をみる

●科学・技術と社会の会のご案内

117th 「21世紀に向かう韓国の科学技術政策方向」

日時：2000年2月10日（木） 6:00PM～8:00PM

場所：〒113-0033 文京区本郷 7-3-1

東京大学社会科学研究所 1F 中会議室

話題提供者：鄭 京澤(CHUNG KYUNG-TACK)氏（大韓民国
科学技術部研究開発 2 担当官）

テーマ：「21世紀に向かう韓国の科学技術政策方向」

118th "The Evolution of the New Telecoms Industry in the
Context of the Internet"

日時：2000年3月9日（木） 6:00PM～8:00PM

場所：〒113-0033 文京区本郷 7-3-1

東京大学社会科学研究所 1F 中会議室

話題提供者：Martin Fransman 氏（Edinburgh University）

テーマ："The Evolution of the New Telecoms Industry in the
Context of the Internet"

119th 文化としての生殖技術

－医療技術への視点と研究手法－

日時：2000年4月14日（金） 6:00PM～8:00PM

場所：〒113-0033 文京区本郷 7-3-1

東京大学社会科学研究所 1F 中会議室

話題提供者：柘植 あづみ氏（明治学院大学）

テーマ：「文化としての生殖技術－医療技術への視点と研
究手法－」

120th 原子力の技術社会学－プルトニウムをめぐる技術と
社会の相互関係－

日時：2000年5月25日（木） 6:00PM～8:00PM

場所：〒113-0033 文京区本郷 7-3-1

東京大学社会科学研究所 1F 大会議室

話題提供者：鈴木 達治郎氏（東京大学）

テーマ：「原子力の技術社会学－プルトニウムをめぐる技
術と社会の相互関係－」

*入会ご希望の方は、下記事務局まで、お名前、住所、電子
メール・アドレス、所属、関心領域をお寄せください。転居
なされた場合も、事務局へご連絡ください。

科学・技術と社会の会事務局

柿原 泰 E-mail: kakihara.yasushi@nifty.ne.jp

●科学技術社会学勉強会

・日時：1月31日（月）17：00～

場所：東大駒場キャンパス 14号館3階 院生室

今回は、『現代思想』2000年1月号（「確率化する社会」特
集号）に収録されたイアン・ハッキングの論文、「人々を作
り上げる」（Ian Hacking, "Making Up People", 1986）を、翻訳を
担当した隠岐が紹介します。ついでに、去年邦訳が出版され
たハッキングの『偶然を飼ひ慣らす』石原英樹・重田園江訳
（木鐸社、1999年）と論文「人々を作り上げる」との関係な

どについて、簡単な解説も行えたらと思います。

・日時：2月29日（火）17：00～

場所：東大駒場キャンパス 14号館3階 院生室

今回は、近年やっと光のあてられつつある日本の近代科学
史・科学論研究の貴重なお話を、次のお二人にいただきま
す。

浅野 建一さんによる卒論のご紹介：明治期の頃の東工大
（当時の東京職工学校）の「材料力学」教育について

水沢 光さんによる修論のご紹介：日本におけるテクノロ
ジー・アセスメント行政の歴史的経過と考察 -工業技術院の
取り組みを中心に-

・日時：3月21日（火）17：00～

場所：東大駒場キャンパス 14号館3階 院生室

今回は、ラングトン・ウィーナー『鯨と原子炉』吉岡齊
訳、紀伊国屋書店、2000年を読みまします。

・日時：4月17日（月）17：00～

場所：東大駒場キャンパス 14号館3階 院生室

今回も引き続き、ラングトン・ウィーナー『鯨と原子炉』
吉岡齊訳、紀伊国屋書店、2000年を読みまします。

第一部の三章と、第二部を読む予定です。

・日時：5月8日（月）17：00～

場所：東大駒場キャンパス 14号館3階 院生室

今回も引き続き、ラングトン・ウィーナー『鯨と原子炉』
吉岡齊訳、紀伊国屋書店、2000年を読みまします。

●科学史・技術史の研究会「火曜日ゼミ（火ゼミ）」の例会
（2000年4月-5月分）のお知らせです。

「火曜日ゼミ（火ゼミ）」というのは、東工大の一室を借
りて行われている科学史・技術史の研究会で、原則として毎
週火曜日の午後に行われています。参加は自由です。

運営は東工大とは一応、独立の「火ゼミ運営委員会」が運
営しています。

問い合わせ先：

梶 雅範 e-mail masanori@me.titech.ac.jp

電話03-5734-2270 F A X 03-5734-2844

場所：東京工業大学（東京都目黒区大岡山2-12-1）

石川台4号館地下ゼミ室B02

時間：とくにことわりがない限り、午後1時20分から

4月18日 Timo Airaksinen（ヘルシンキ大学哲学科）（於 国
際交流会館本館会議室 15:00-17:00）

技術における倫理の位置づけ（The Place of Ethics in
Technology）

4月25日 山崎正勝（東工大）「ピーター・ギャリソン『イ
メージ&ロジック』よせて－非相対主義的科学的真理論に
ついて－」

5月2日 休み

5月9日 高橋憲一（九州大学）「ガリレオの運動論の形成」

5月16日 吉見義明（中央大学商学部）（14:30～）「日本に
おける化学兵器の歴史について（仮）」

5月23日 休み

5月30日 梶 雅範 (東工大) 「日本の近代化遺産への旅」

●●開催状況 (イベント) ●●

●第11回: 湘南科学史懇話会のお知らせ

1. 日時 2000年6月14日 (日) 13:00-17:00
2. 場所 藤沢市民会館、第3会議室
3. 講演者 古川 安 (東京電機大学・科学史)
4. 演題 高分子科学の社会史

[要旨]

—昨年アメリカでInventing Polymer Science: Staudinger, Carothers, and the Emergence of Macromolecular Chemistry を上梓した。同書は1920~1940年代における高分子科学の誕生の過程を、この分野の創始者である2人の化学者シュタウディンガー (独) とカラーザース (米) の活動とその周辺に焦点を当てて描いたものである。

高分子科学史には、科学者の論争、専門学問の形成、異分野間の相互作用、技術・産業との連関、政治・戦争との関わりなど、「科学の社会史」として興味深い題材が含まれている。本書の全般的な内容紹介をするとともに、いくつかの社会史的側面を掘り下げて論じたい。

5. 幹事 猪野修治 (代表)、中村邦光、廣政直彦、竹中英俊、加納 誠
6. 連絡先

猪野修治 〒242-0023 神奈川県大和市渋谷3-4-1

TEL: 0462-69-8210 e-mail: shujiino@ma4.justnet.ne.jp

FAX: 0462-69-8213

●「先端科学技術と社会」第36回研究会

科学技術の高度化は、それを受容する社会との間に、数々の解決すべき課題を提起しています。セミナー「先端科学技術と社会」では、このような問題にまつわる刺激的な話題の提供者をお招きし、年間10回のペースで研究会を開催しています。

例会の第36回は、約3年ぶりに名和小太郎先生の登場です。知的所有権問題、技術倫理綱領の問題など、各方面でご活躍の先生に、今回は学術情報についてお話をいただきます。大変興味深いお話がうかがえると存じますので、ふるってご参加下さい。

なお、通常より開始時間が一時間遅くなっていますのでご注意ください。また、終了後に恒例の懇親会を開催いたします。

日時: 2000年3月30日 (木) 18:30-20:30

内容: 「学術情報の電子化—制度的・技術的・産業的環境とのかかわり」名和小太郎 (関西大学・総合情報部)

会場: 東京工業大学大岡山キャンパス・百年記念館・第5会議室

世話人: 東京工業大学大学院社会理工学研究科 中島秀人
東京大学先端科学技術研究センター 大谷卓史

連絡先: 〒152-8552 目黒区大岡山2-12-1

東京工業大学大学院社会理工学研究科 中島研究室

tel/fax 03-5734-3255 e-mail nakajima@mail.me.titech.ac.jp

●「吉野川可動堰の問題を考える」

(京都女子大、神戸大合同自主ゼミ プレ企画)

日時 5月11日 午後3時

場所 京都女子大学S校舎3階 現代社会プロジェクト室1

問い合わせ先 平川秀幸 (研究室 Tel: 075-531-9171 E-Mail: hirakawa@kyoto-wu.ac.jp)

報告者

四宮彩 (神戸大学国際文化学部)

「徳島からの現地報告」

塚原聡 (京都大学大学院, 元東京地検検事)

「環境法のアウトライン」

●生化学若い研究者の会名古屋支部主催 2000年初夏のセミナー ~21世紀のライフサイエンス~

後援: 日本生化学会

協賛: Takara, 木下理科, MS機器, アマシャム・ファルマシア・バイオテック, 日本ベクトン・ディッキンソン, 和光純薬工業, 理科研株式会社

今回、名古屋支部の企画として、「初夏のセミナー」を開催することに致しました。テーマは「21世紀のライフサイエンス」です。21世紀はライフサイエンスがさらに大きく発展していく世紀であると、多くの人が考えているでしょう。その激流の中で私達はどのようなスタンスで研究を行い、社会に貢献してゆくべきでしょうか。そして、「がん」や「脳」といった今世紀のトピックとなった研究は、来世紀どのような展開をみせてゆくのでしょうか?

今回のシンポジウムでは、こういったテーマに沿って3人の先生をお招きします。1人はバイオジャーナリストの草分け、日経BP社の宮田満先生、1人は「がん」研究の第一人者、東京大学医科学研究所の澁谷正史先生、そしてもう1人は「脳」研究のリーダー、理化学研究所の伊藤正男先生です。それぞれの分野で精力的に活動されている先生方のお話は、きっと若手研究者に対する来世紀への道しるべとなることでしょう。1人でも多くの方の御参加を心よりお待ちしております。

また、講演終了後には懇親会を開催いたします。こちらの方にも参加していただき、名古屋周辺の学生、若手研究者間で親睦を深めることができると願っております。皆様どうぞふるって御参加下さい。

<日時> 2000年5月20日 (土)

<会場> 名古屋大学医学部 基礎研究棟講義室 (名古屋市昭和区鶴舞町65)

※サイトにより詳しい情報、講演要旨、アンケートなどがあります。

<<http://www.seikawakate.com/sibu/nagoya/2000symp.html>>

●シンポジウム「地域発、地球温暖化対策~100年後の江戸川区を見すえて~」

アースデイえどがわ企画

シンポジウム「地域発、地球温暖化対策~100年後の江戸川区

を見すえて～」

日時 2000年5月20日(土) 13:00～17:00

会場 江戸川区葛西区民館(江戸川区中葛西3-10-1)

テーマ 100年後の江戸川区を見すえて

主催 足元から地球温暖化を考える市民ネット・えどがわ

後援 江戸川区

協賛 気候ネットワークほか

内容

基調講演「地域で地球温暖化対策をする意味とは」

須田春海さん(全国地球温暖化防止活動センター共同議長)

報告「江戸川区地球温暖化対策推進実行計画について」

丹羽康雄さん(江戸川区環境清掃部公害対策課長)

連絡先 足元から地球温暖化を考える市民ネット・えどがわ

事務局 TEL/FAX 3654-9188 E-mail yamachan@jca.apc.org

担当: 奈良・山崎

●総研大 地域社会交流プログラム

湘南国際村のイベントの一環として総研大の地域交流プログラムがあるようです。

開催場所: 総合研究大学院大学

5月3日(水)～7日(日) 10:00～16:00

・特別展示『科学の眼でみる日本の歴史』(セミナー室)

本年度から総合研究大学院大学に参加した国立歴史民俗博物館による特別展示で、さまざまなテクノロジーを利用した歴史史料の分析研究の成果を展示します。

○最先端の技術による年代測定

○CG(コンピュータ・グラフィックス)による三内丸

山遺跡の復元

○赤外線を用いて肉眼では見えない文字の解読

○X線による江戸屏風の解析

・写真展示『総合研究大学院大学紹介』

5月4日(木)

・特別講演『社会と科学—人類にとって科学とは何か—』

(講義室 13:00～)

廣田 榮治(総合研究大学院大学・学長)

近代合理主義を土台として興隆した科学は、20世紀に入り、技術と相携えて長足の進歩を遂げた。人類社会への貢献には計り知れないものがある。このような科学の著しい発展はその対象である「自然」を、主体である人類から明確に画することによってもたらされたのである。しかし、皮肉なことに、その発展が人類との隔壁を犯しつつある。21世紀に向け、人類は科学の恩恵に浸るだけでなく、科学との間に新しい関係を構築するよう迫られている。

・パネルディスカッション 『インターネット時代のコミュニケーション』(講義室 14:30～)

司会: 及川昭文(総研大)

パネリスト: 奥野卓司(関西学院大学)、白川 文造 (BSフジ)、出口 正之 (総研大)、柴崎 文一 (総研大)

5月5日(金) 10:00～

・学術講演会 『生命・光 (いのち・ひかり)』シリーズ 第3回

司会: 寶来 聰 (総合研究大学院大学)

○「免疫とは何か」大田竜也(総研大)

○「トンネル顕微鏡で見る原子・分子の世界」高木紀明(総研大)

<<http://koryu.soken.ac.jp/home/index09.htm>>

●ナチュラル・ステップ(TNS)活動紹介セミナー

「ナチュラル・ステップって何だろう」「どんな活動をしているの」…。ナチュラル・ステップを一から知りたい方のためのセミナーです。

開催日時: 2000年4月25日(火) 18:30-20:30

開催場所: NERセミナールーム

〒102-0075 東京都千代田区三番町28 秀和三番町ビル8F

TEL: 03-5215-8261

参加費(資料代): 5,000円(当日会場で徴収)

受講人数: 20名(先着順)

プログラム:

1) ナチュラル・ステップとは

2) ナチュラル・ステップの活動

3) ナチュラル・ステップ・ジャパン(TNSJ)へのお誘い

・TNSJの紹介

講師:

レーナ・リンダル ナチュラル・ステップ・ジャパン理事

竹内 秀年 ナチュラル・ステップ・ジャパン理事

問合せ&申し込み先:

*氏名, 所属, 連絡先TEL, Eメールを記入して、

ナチュラル・ステップ・ジャパン事務局 神谷 宛 までお願いいたします。

e-mail: kkamiya@ner.co.jp FAX: 03-5215-8260 (TEL:03-3221-4881) <<http://www.tnsj.org/>>

●20世紀を振り返る—21世紀への橋渡しとして必要なものは何か—

参加費: 無料

「トリレンマシンポジウム 2000」プログラム

テーマ: 20世紀を振り返る—21世紀への橋渡しとして必要なものは何か—

期日: 平成12年6月1日(木) 12時30分 受付

場所: 有楽町朝日ホール

13:00挨拶 電力中央研究所顧問 依田直

13:10「トリレンマ有識者会議」からの提言:

中央環境審議会会長 近藤次郎

13:15 講演「21世紀の問題群」:

京都大学経済研究所教授 佐和隆光

13:40 外国からのメッセージ紹介

エイモリー&ハンター・ロビンス(アメリカ)

スーザン・ジョージ(フランス)

エルンスト・ワイツゼッカー(ドイツ)

ペーター・ハイニック(ドイツ)

モンコンブ・スワミナタン(インド)

ラジェンドラ・パチャウリ(インド:未定)

14:05 講演「変質する科学と社会」

国際基督教大学教養学部教授 村上陽一郎

講演「産業と社会の今後—人類生存のために」

国連大学副学長 鈴木基之
講演「変わりゆく人間と社会：ジェンダー・世代・家族」
千葉大学教育学部教授 宮本みち子
15:40 パネルディスカッション
コーディネーター：日本経済新聞社常務取締役
17:30 閉会挨拶 電力中央研究所理事長 佐藤太英
17:40 閉会
<<http://criepi.denken.or.jp/PR/Event/trilemma/index-j.html>>

●バイオ技術産業化推進(BIP)フォーラム
第2回シンポジウム

主催：バイオインダストリー協会(JBA)
後援：通産省、日経BP社
1.日 時：平成12年4月17日(月)
13:00~19:30(含む：懇親会)
2.場 所：学士会館(東京・神田)
3.定 員：250名(盛況につき会場を拡張し、定員を増加しました)
4.目 的：キャピタリストおよびバイオ企業に対し、TLOのバイオ技術の紹介を行うと共に、優良バイオベンチャーの紹介を行う

5.プログラム：

- 1) 主催者挨拶——JBA専務理事 地崎 修
 - 2) 講演(13:05~14:10)
 - ・会社設立から上場までの軌跡——
日本ケミカルリサーチ(株) 社長 芦田 信
 - ・東証マザーズの紹介——
東京証券取引所 新規上場サポート室
課長 白橋 弘安
 - 3) TLOのバイオ技術及び優良バイオベンチャーの紹介(14:30~17:30)
 - 4) ネットワーキングと懇親会(17:45~)
- 6.参加費：JBA会員は5,000円、非会員は10,000円(消費税を含む)(但し、ホームページによる事前申込者は1,000円引き)
お問い合わせ先：(財)バイオインダストリー協会
Email: niimura@jba.or.jp
もしくは TEL: 03-5541-2731 FAX: 03-5541-2737
担当：千木良(ちぎら)、新村(にいむら)
<<http://www.jba.or.jp/bip-forum/>>

●総力戦へのジェンダー動員—ドイツと日本1932-1945
日時：2000年04月10日16:50~18:30
場所：東京大学、本郷キャンパス、法文2号館1大教室
(スライド付き/講演は英語)
講師：Prof. CLAUDIA KOOZ
演題：MOBILIZING GENDER FOR TOTAL WAR:GERMANY AND JAPAN 1932-1945(「総力戦へのジェンダー動員—ドイツと日本1932-1945」)
主催：東京大学人文社会系研究室上野研究室
Claudia Koonzさんは、Duke大学歴史学部教授。ドイツ女性の対ナチ協力をテーマに『父の国の母たち Mothers in the Fatherland』(姫岡とし子訳、時事通信社)を著し、歴史修正

主義論争にジェンダーの視点から一石を投じたドイツ系アメリカ人の歴史家です。
・問い合わせ先
Chizuko Ueno
Graduate School of Humanities and Sociology
The University of Tokyo
7-3-1 Hongo, Bunkyo-ku,
Tokyo, JAPAN 113-0033
Phone: +81-3-5841-3875
Fax: +81-3-5841-8930
Email: ueno@l.u-tokyo.ac.jp

●生物学史分科会4月例会のお知らせ

日時：4月29日(土)午後3時~
発表者：新妻昭夫氏
演題：ウォーレスの人種差別論文と転向：
1864年3月~1869年3月
会場：東京大学駒場キャンパス14号館
*新妻昭夫氏は恵泉女学園大学国際社会文化学科教員。「人種」的偏見が少なかったといわれるウォーレスにも見られた差別的言説とその変化について考察されます。

●第3回生活環境設計シンポジウム

テーマ
「21世紀に向けた人間—生活環境系学問体系の展望」
日時：平成12年3月29日(水)13:00~17:30
場所：日本学術会議 大会議室
主催：日本学術会議・社会環境工学研究連絡委員会・生活環境設計専門委員会
演題および発表者
・環境学の構築は可能か
大井 紘(環境庁国立環境研究所)
・生活環境設計方法論研究の枠組みとは何か
窪田陽一(埼玉大学)
・複雑系の原理に基づく人間—環境システムの基本モデルを目指して 河村 廣(神戸大学)
・生活環境の再構築に向けた情報と参加の役割
村山武彦(福島大学)
・シンセシスの科学としての人間—生活環境系のデザイン方法論の展望 門内輝行(早稲田大学)

●原子力資料情報室第39回公開研究会 「JCO臨界事故を検証する(1)中性子線被曝の実態」
<<http://www.jca.apc.org/cnic/action/events/>>
2000年3月17日(金)18:30~
報告：今中哲二さん(京都大学原子炉実験所)
アピール：大泉昭一さん(臨界事故被害者の会)
全水道会館(JR水道橋駅・都営三田線水道橋駅)
<<http://www.jca.apc.org/cnic/action/events/map/zensuidou.gif>>
資料代800円

日本の原子力開発史上最悪のJCO臨界事故。東海村や那珂町の一般住民が20時間もの間、中性子線にさらされ続けまし

た。こんな異常な事故は、世界で初めてです。中性子線による被ばくが私たち人間にどんな影響を与えるのか、放射線の基本的な問題やこの臨界事故の被害状況、事故の実態について今中さん、大泉さんにお話しさせていただきます。

=====
原子力資料情報室 (CNIC)
Citizens' Nuclear Information Center
〒164-0003 東京都中野区東中野1-58-15 寿ビル3F
TEL.03-5330-9520 FAX.03-5330-9530
<http://www.jca.apc.org/cnic/>
cnic-jp@po.iijnet.or.jp
=====

●「20世紀の技術 その総括的分析」

20世紀における科学と技術の展開は人類史上においてもきわめて急激なもので、原子の領域や宇宙の領域にまで人類の活動が直接的に関与するようになってきています。また、科学と技術、科学者・技術者は2度にわたる世界大戦にも深くかかわり、その社会的存在形態が問題提起されてきたが、近年も地球の自然環境に関連しても生産力の質の問題が、科学・技術のあり方の問題と関わって提起されてきています。

こうして、20世紀の科学や技術を、それ自体の内実とともに社会との関わりにおいて総括的に分析することは、21世紀の科学と技術を考えていく上で必要なこととして考えられるようになってきています。

とくに、技術はこれまでの人類の存在基盤としての物質的生産力をどのように形成してきたかという問題に直接的に関わり、20世紀の技術を考察することは将来の技術のあり方を考えるだけでなく、人類社会全体の歴史と未来を考察することにもつながる重要な課題と考えられます。

こうした視点から、本シンポジウムは、1998年の「20世紀の科学」シンポジウムにつづいて、「20世紀の技術」を検討するものです。

なお、本シンポジウムは、2回に分けて行ないます。

第1回は下記のように機械や電気、鉄鋼、化学等の個別分野を振り返って検討し、また第2回は、エネルギー、コンピュータ、原子力、原爆（軍事）、生産力、運輸、環境問題等複合的分野にまたがる問題を社会との接点から検討する予定です。

主催 日本学術会議科学史研連委員会、

後援 日本科学史学会

開催日時 2000年3月20日（月祝日）午後1時～4時30分

開催場所 明治大学13号館第2会議室

内容

- 1 趣旨説明 木本忠昭（研連委員、東京工業大学教授）
- 2 20世紀の機械技術の発展 その総括的分析（仮題）
三輪修三（元青山学院大学副学長）
- 3 20世紀の電気技術 その総括的分析（仮題）
石井彰三（東京工業大学教授）
- 4 20世紀の鉄鋼技術 その総括的分析（仮題）
黒田光太郎（名古屋大学教授）
- 5 20世紀の化学技術 その総括的分析（仮題）

飯島 孝（岐阜経済大学教授）

- 6 総合討論 各分野の展開を全体的にはどうみるかー司会
奥山修平（中央大学教授）

●学際シンポジウム

「遺伝子組換え作物をめぐる諸問題と社会・政治・経済」

日時：3月27日（月）16:00-20:00

会場：名古屋市 愛知厚生年金会館（地下鉄池下駅下車）

主催：植物生理若手の会、育種若手の会、Complexity Science Community／（財）未来工学研究所、（有）DGC総研

【スケジュールおよびパネラー】

16:00-16:10 主催者あいさつ

16:10-16:20 GM作物に関するブリーフィング
：立川雅司（農業総合研究所）

16:20-16:50 宮田満（日経バイオテク）
「演題未定」

16:50-17:20 蔦谷栄一（農林中金総合研究所）
「日米欧の農業生産・貿易構造とGMO」

17:30-18:00 白幡洋三郎（国際日本文化研究センター）
「演題未定」

18:00-18:30 中澤港（東大大学院医学系研究科）
「人類生態学の視点からみた遺伝子組換え技術」

18:30-18:40 休憩

18:40- パネルディスカッション

ホームページから参加登録と意見を述べられます。

<<http://mayumi.narc.affrc.go.jp/ikuwaka/gmsympo>>

をご覧ください。詳しい情報も、ホームページをご覧ください。

【問い合わせ先】

玉置雅紀

国立環境研究所 地域環境研究グループ

〒305-0053 茨城県つくば市小野川16-2

TEL:0298-50-2466, FAX: 0298-50-2490

E-mail: mtamaoki@nies.go.jp

<<http://mayumi.narc.affrc.go.jp/ikuwaka/gmsympo>>

●NTTサイエンスフォーラム 「21世紀の先端医療—ゲノムの解説は何をもたらすか?—」

<<http://www.sctlg.ecl.ntt.co.jp/event/SF11/>>

日時 平成12年4月6日（木） 13:00-18:00

会場 東京厚生年金会館ホール

●21世紀の地学教育を考える大阪フォーラム 第2回 プレフォーラム 兵庫

（主催：「21世紀の地学教育を考える大阪フォーラム」実行委員会）

日時：2000年3月25日（土） 13:00～17:00

<入場無料>

場所：兵庫県立芦屋高等学校同窓会館（芦屋市宮川町6-3）

プログラム

挨拶 21世紀の地学教育を考える大阪フォーラム

実行委員長 中川 康一（大阪市立大学大学院教授）

基調講演 「21世紀の地学教育に向けて」

波田 重熙 (神戸大学 大学教育研究センター教授)

講演1 中学校地学分野での学習事例

久保 和弘 (神戸大学附属住吉中学校教諭)

講演2 生きる力を育てる総合学習

～手作りの学校ビートープ

辰見 武宏 (神戸市立広陵小学校教諭)

講演3 兵庫県南部地震の被害から見た地学教育への教訓

田結庄 良昭 (神戸大学発達科学部教授)

講演4 宇宙史・地球史に学ぶ

黒田 武彦 (兵庫県立西はりま天文台台長)

講演5 博物館から見た地学教育の問題点

先山 徹 (兵庫県立人と自然の博物館

・姫路工業大学助教授)

総合討論 学校教育、専門教育、社会教育の各分科会の代表者より報告

司会 藤岡達也 (大阪府教育センター指導主事)

閉会の挨拶 (大阪フォーラムに向けて)

八尾 昭 (大阪市立大学大学院教授)

連絡先 事務局

〒558-8585 大阪市住吉区杉本3-3-138

大阪市立大学大学院 理学研究科・地球学教室

Tel 06-6605-2588, 2592 Fax 06-6605-2522

<<http://www.sci.osaka-cu.ac.jp/~knaka/osaka-forum.html>>

(<<http://geolo.sci.osaka-cu.ac.jp>>)

nobita@geolo.sci.osaka-cu.ac.jp

●シンポジウム「科学の進歩と人間の未来」

シンポジウムのお知らせ

東京・恵比寿の日仏会館では傘下の自然科学系8学会とともに、「科学の進歩と人間の未来」と題したシンポジウムを開催します。

ご興味をおもちの方はお出かけください。

科学部門フランス政府給費留学生の会

Un symposium "Le progres scientifique et l'avenir de l'homme" aura lieu le samedi 11 mars 2000 a la Maison Franco-Japonaise.

- 「科学の進歩と人間の未来」 -

日時：2000年3月11日 (土) 9:00~16:30

会場：日仏会館1Fホール/入場無料

最近目覚ましい進歩を示している生物学。我々は専門の如何を問わず、そこに「人間の本質」を改めて見直し、認識を深める必要を痛感します。理系日仏諸学会は1998年12月の諸学会総合シンポジウムで提起されたこの課題を継承し、医学、生命倫理、植物学それぞれの先達者を迎えて、このシンポジウムを企画しました。理系、文系にこだわることなく、多数の方のご参加を念願しています。

「科学の進歩と人間の未来」 シンポジウム

10:00 開会の辞 飯山 敏道 (日仏会館常務理事)

10:10 経過報告 中村 広明 (日仏農学会)

10:20 講演 (1) 森 亘氏 (日本医学会会長)

「これからの医学に想う」

13:30 講演 (2) 青木 清氏 (上智大学生命科学研究所所

長 「生命科学の進歩と人間の生存を考える」

15:00 講演 (3) 駒嶺 穆氏 (日本植物学会会長) 植物バイオテクノロジーは21世紀の地球生命圏の危機を救えるか

16:30 閉会の辞 小林 善彦 (日仏会館常務理事)

閉会后、ワインパーティーがあります。

主催：日仏会館、日仏医学会、日仏獣医学会、日仏海洋学会、日仏工業技術会、日仏農学会、日仏理工科会、日仏生物学会、日仏薬学会

●第一回研究問題メーリングリスト・シンポジウム

「広がりつつある理工系出身者の活躍の場」

現在進められている大学院重点化やポストク支援拡充政策の目的の一つに、「日本の科学技術の強化」が挙げられます。しかし、増員された大学院生やポストクが従来通りの方法で特定分野の研究活動を行うだけでは、その実現は望めないでしょう。それらの人々の一部が、様々な形で科学技術の成果の社会還元を担うようになって初めて、研究者拡充計画の目的が達成されるのではないのでしょうか。

一方、現在大学院生あるいはポストクの立場で理工系の研究を行っている研究者の多くは、どのような形で就職し、自ら学び研究したことを活かすかという切実な問題に直面しており、研究者をめぐる環境や社会状況を議論する場である「研究問題メーリングリスト」でも活発な議論が繰り広げられました。

本シンポジウムでは、広がりつつある理工系出身者の活躍の場について、5人の講師に話題提供をお願いし、大学生や大学院生・ポストクの方々に情報提供を行います。同時に、科学技術をめぐる問題がますます複雑化してゆくことが予想される今後の社会において、どのような人材が求められるのかを議論するきっかけにもなれば幸いです。

日時：2000年3月4日(土) 13:00-17:30

場所：東京大学先端科学技術研究センター 新4号館講堂

13:00-13:10 開会の挨拶

研究問題メーリングリスト上でのこれまでの議論の経緯などを説明いたします。

13:10-13:40 「東工大に見る若手研究者の諸問題」

梶雅範：東京工業大学大学院・社会理工学研究科・助教授

13:40-13:50 質疑応答

13:50-14:20 知的財産マネジメントの現状と将来像

隅藏康一：東京大学・先端科学技術研究センター・助手

弁護士・弁理士・ライセンスアソシエイト・特許流通アドバイザー・TLOスタッフ・ベンチャーキャピタリスト・ベンチャー企業のマネージャーなどの仕事を紹介します。「技術開発と知的財産権」に関する研究についても、その一端を紹介します。

14:20-14:30 質疑応答

14:40-15:10 科学ジャーナリズムからみた研究成果の社会還元

——市民と研究者の共存共栄のための戦略は成り立つか

林 衛：ジャーナリスト (‘科学’編集部)

科学研究が資金面に内容面においても大規模に進展している今日、その成果を生かす道筋があらためて問われている。西欧では科学の有用性が気づかれる前にポケットマネーで科

学研究をおこなう時代があった。明治のころすでに有用なものと感じられていた科学を輸入した日本では、以来公的資金を投入した国営の科学が展開されてきた。その限界が明らかになったいま、科学のもつ普遍性や一般性、真理追究の心を武器に、市民のための科学を実現するという新しい方向性が見えてきている。

15:10-15:20 質疑応答

15:20-15:50 科学技術行政関係・・・米国NIHの科学運営官制度に何を学ぶべきか

白楽ロックビル(林正男)：お茶の水女子大学・理学部・助教授

米国NIHでは、バイオの研究者だった人が科学運営官になり、全米の生物医学研究を運営しています。官僚やお役人が、科学の博士号をもっており、研究に精通しています。このシステムを、研究費配分の方法と併せてお話します。

15:50-16:00 質疑応答

16:00-16:30 簡単になれる科学ジャーナリスト

宮田満：日経バイオテクノロジー編集長

16:30-16:40 質疑応答

16:40-17:30 フリートーク

参加者が、詳しい話を聞きたい講師のところに行って個別に話を聞く時間をとります。

参加無料、事前予約不要 問い合わせ先： TEL 03-5452-5262 事務局

ウェブ：

<<http://www.seikawakate.com/research/research.html>>

●「教育環境のデザイン」研究分科会 研究発表会「テクノサイエンスの現在」

すでにお知らせしました研究発表会ですが、以下のよう次第が決まりましたのでお知らせします。現在、注目されているテクノサイエンス研究について、チュートリアルをふくむ、発表会となります。ぜひご参加下さい。

なお、このアナウンスは、転載を歓迎しますので、興味のある方へぜひお知らせ下さい。

茂呂雄二(筑波大)

日時：2000年3月4日(土曜日) 午後1時より

場所：筑波大学学校教育部(大塚キャンパス)G 206室

会費：会員は無料、非会員は1000円(資料代です)

参加申込：先着60人

申し訳ありませんが今回は部屋が狭小です。60人をもって締め切りにさせていただきます。茂呂までメールでお知らせ下さい。

プログラム(タイトルは一部仮題です：発表順は未定です)

第一部 チュートリアル「テクノサイエンス研究の現在」

(1) 上野直樹(国立教育研究所)

「テクノサイエンス研究と認知科学、教育研究の交差」

(2) 伊藤瑞子(スタンフォード大学)

「テクノサイエンス研究とフェミニズム社会学：思想史的背景から」

(3) 中村和生(明治学院大)

「実験室研究、表象研究、テクノサイエンスの経緯－ラトール、リンチを中心に－」

第二部 研究発表「テクノサイエンス研究の実際」

(1) 青山征彦(筑波大)

「薬品卸にみるコミュニケーションのコントロール：バウンダリークロッシング再考」

中部地方の薬品卸でのインタビューをもとに、あえてバウンダリーを作り出すようにコントロールされている様々な道具の用いられかたについて報告する。

(2) 池谷のぞみ(東洋大学)・岡田光弘(筑波大学)・藤守義光(明治学院大学)

「ヴィジュアル・オリエンテーションの実践的マネジメント：「みること」の組織化の多様性」

ヴィジュアル・オリエンテーション(visualorientation)に関わる動詞はクルターとパーソンズが指摘しているように、数多くある。本報告では、このヴィジュアル・オリエンテーションがさまざまな活動の一部としていかに組織化されるのか、その実践的マネジメントに焦点をあて、そのモードの多様性について考察する。メディカル・カンファレンスの場面を例として取り上げる予定である。

(3) 川床靖子(大東文化大)

「社会－道具的システムの再編としての標準化」

あるアメリカの部品工場がトヨタ生産システムをインプリメントした実践の分析を通して、「標準化」とはどのようなことなのかについて考えてみる。

(4) 高橋秀明(メディア教育開発センター)

「大学教官とテクノロジー：SCSを題材として」

通信衛星を用いた大学間教育交流ネットワークであるスペース・コラボレーション・システム(SCS)が事業化されて3年が過ぎた。SCSは、遠隔教育のための基盤として整備されたものであるが、ユーザである大学教官にとってはそれ以上の社会的および政治的な意味を持つものとして捉えられてきたと考えられる。その一端を、主に筆者が行ったインタビュー調査から、いくつかのエピソードを交えて紹介する。(SCSについては、<<http://www.nime.ac.jp/SCS/>>を参照のこと)

●公開シンポジウム 21世紀の自然科学教育はいかにあるべきか?－学校(大学を含む)における科学教育は何を目指すか?－

まもなく私達は新しい世紀を迎えます。しかしこの世紀の分岐点にあって日本の教育には二つの相異なる方向ベクトルが働いているように見えます。(数学を含めた)自然科学・科学技術の発展・普及はそれについてのより広範な知識・理解を人々に求めています。日本人の数学・理科に対する関心・理解は世界の最低レベルにあり、しかも悪化の一途です。また政府は「教育改革」の中で(自然科学系諸学会等の「学力低下」を懸念する声にも関わらず)「ゆとり」教育を実現するため、学習内容の大幅な削減を行おうとする一方で、「科学技術創造立国」政策を推し進めようとしています。これらの矛盾を解決し、日本の自然科学教育(数学・理科教育)を望ましい方向へと向けることは果たして可能なのでしょうか?

私達理数系諸学会は、その会員の多くが大学・大学院等での教育・研究に携わるとともに、文化としての学問を担う者

達の集まりとして、初等中等教育、特に科学教育の問題にも深い関心を持ち、この研究集会を企画しました。講師としては、関連するできるだけ広い分野から、それぞれの場で指導的立場にある方々をお願い致しました。建設的な議論の中で、上記の困難な問題を解決する糸口を見出す機会としたいと願っています。

関心をお持ちの方々が是非多数御参加下さいますようお願い申し上げます。

開催日： 2000年2月6日(日)

開催時間：10:00-17:30(開場：9:30)

開催場所：東京大学(駒場)大学院数理学研究科棟大講義室

連絡・問い合わせ先：浪川 幸彦

郵便：〒464-8602 名古屋市千種区不老町

名古屋大学大学院多元数理学研究科

Tel & Fax：052-789-4746

E-mail address：namikawa@math.nagoya-u.ac.jp

●「東大生への遺言」シリーズ 第2回

「東大生への遺言」シリーズの第2回は、戦後の消費者運動や生協運動の牽引車として国際的にも活躍してこられた野村かつ子さん(89歳)を、講師にお招きしました。このシリーズは、20世紀のさまざまな社会的運動の先頭に立って活躍してこられた時代の先覚者のお話をうかがうものです。諸君が後になって「あの人の話を聞けてよかった」という方に毎回登場を願っています。公開ゼミですので、どなたでも自由に参加できます。

講師 国際消費者機構(IOCUC)名誉顧問

野村かつ子さん

日時 1月27日(木) 午後4時半から

場所 旧理学部号館2階 250号講義室

問い合わせは、新領域創成科学研究科 石研究室まで(03-5841-8580)

野村かつ子さんの横顔 1910年に京都市に生まれる。同志社大学卒業後、日本協同同組合同盟、婦人職業協会、総評主婦の会などをへて、日本消費者連盟の創設に参画した。米国で消費者運動を起こした弁護士のラルフ・ネーダー氏とも親しく、国際消費者機構(IOCUC)など国際的な消費者運動でも活躍してこられた。

●シンポジウム「21世紀のエネルギー選択」

電力を中心にした21世紀のエネルギーをどう確保するのか。東海村の臨界事故の実態報告を踏まえた原子力の安全性のほか、資源問題、人口問題、環境問題など、様々な観点から将来のエネルギー選択を考えるシンポジウムです。

プログラム

第1部

基調講演「原子力の安全管理について」

住田健二氏(原子力安全委員会委員)

第2部

パネルディスカッション「21世紀のエネルギー選択」

パネリスト 浅岡美恵氏(弁護士、気候ネットワーク代

表)、飯田哲也氏(株)日本総合研究所主任研究員、市民フォーラム2001運営委員)、内山洋司氏(電力中央研究所経済社会研究所上席研究員)、住田健二氏(原子力安全委員会委員)。コーディネーター 鈴木篤之氏(東京大学大学院工学系研究科教授)

日時：2000年1月25日(火)13:30~17:00
(開場13:00)

場所：有楽町朝日ホール(千代田区有楽町2-5-1 有楽町マリオン11階)

主催：朝日新聞社

後援：通商産業省資源エネルギー庁、科学技術庁(予定)

入場無料

〒104-8665 京橋郵便局私書箱303号 朝日新聞社

『21世紀のエネルギー選択』シンポジウム係

TEL 03-3668-3005 FAX 03-3666-3930 E-mail

sympo@ce.mbn.or.jp

締め切り 2000年1月14日(金)消印有効

●●文献情報●●

●『北欧のエネルギーデモクラシー』新評論

第1章 「風力発電」が走る！—グリーン電車の登場とスウェーデン電力市場改革

第2章 「化石燃料ゼロ」を宣言した町—スウェーデンのローカルアジェンダ

第3章 脱原発に挑戦するスウェーデン

第4章 スウェーデンのエネルギー未来像

第5章 原発を拒否したデンマークのデモクラシー

第6章 デンマークのエネルギー未来像

第7章 風車を共有する人々

第8章 自然エネルギー自給を目指す島々—アイルネット

と欧州の再生可能

エネルギー戦略

終章 不安の時代を超えて—「エコロジカルな民主化」に向けて

●以下、平井氏より

1. 森永晴彦「原子炉を眠らせ、太陽を呼び覚ませ」(草思社、1997)

JCOまでの一連の事故をみると、原発に賛成・反対の立場をこえた科学者としての著者の、日本の原子力政策を糺し、市民生活をより安全で豊かにするための提言は貴重である。

2. リチャード・C・レウオンティン著、川口啓明、菊地晶子訳「遺伝子という神話」(大月書店、1998)

著者は、ステイブン・J・グールド以上の社会生物学の批判者でかつ、アメリカの指導的集団遺伝学者。科学と社会の関係について具体例を上げて、読む者を説得しようとしている。それでも私には彼の主張の一部が今もちょっとひっかかっている……。

3. マーク・ダウィ著、平澤正夫訳「ドキュメント臓器移

植」(平凡社、1900)

臓器移植と政治・経済の関係が生々しく語られている。原書は1988年に出版されているが、次に紹介する「人体部品ビジネス」と合わせて読むことで、一連の経過が見えてくるように思う。

4. 栗尾剛「人体部品ビジネス—『臓器』商品化時代の現実」(講談社、1999)

フィリピン、インドでのフィールドワークの結果をふまえて、理学部、法学部で学んだ視点から、臓器移植の問題をとらえている。私のような学者でない者にとって読みやすい本。

5. クレア・シルヴィア、ウィリアム・ノヴァック著、飛田野裕子訳「記憶する心臓—ある心臓移植患者の手記—」(角川書店、1998)

うそのような、本当の話?!。心肺同時移植によって、食べ物のお好みや性格にまで変化が出てくるんだあ……。

●『自然の政治』(Latour)

Latourの『自然の政治』(Politiques de la nature: Comment faire entrer les sciences en démocratie)が、去年の8月?9月?に出版されたようです。We have never been modernの続編ということで、新しい形での政治的エコロジーを提唱しているようです。

裏表紙の紹介によれば、

「科学(自然の理解に責任を負っている)と政治(社会的生活を調整に責を負う)を分離している—見乗り越えがたい隔たりを、いかに埋めることができるのか。両者の分離の帰結は、血液問題、石綿問題など、ますます破局的なものとなっている。政治的エコロジーはそのような困難に回答をもたらすと主張した。しかし、そのセンセーショナルな登場以降、それは公共生活を革新させるにはほとんどいっていない。『われわれはかつてモダンだったことはなかった』の続編をなす本書で、ブルノ・ラトゥールは、政治的エコロジーを考える新しいやりかたを提案する。

自然はつねに、公共生活の半極をなしてきた。それは、われわれがともにする公共的世界を結集するものである。もう一方の極は政治と呼ばれるもので、利害と激情の競争である。つまり、われわれを結集する一方の極に自然があり、分離するもう一方の極に政治があるというわけだ。それゆえ、自然に対する配慮が政治的エコロジーを特徴づけると主張することは誤っている。というのも、政治的エコロジーが引き起こす科学的論争がゆえに、そしてそれが引き起こす価値の不確かさのゆえに、政治的エコロジーは公共的な組織化の方法として自然に依拠するのを放棄しなければならないのだ。それゆえ、問題は以下のようになる。結局のところ、自然ぬきの政治をどのように考えることができるのか、と。

ブルノ・ラトゥールにとって、その解決は、科学活動と政治活動をともに根本から再定義することにかかっている。そこでは科学活動は、社会のありふれた競争に再統合され、政治活動は公共世界の漸進的な作り上げとして理解

される。重要な本書において非常な厳密さでもって探求されるのは、そのような再規定の条件と制約なのである。科学哲学と政治哲学の交差点で、本書はエコロジーや科学論争、政治的討議における専門家の役割、そしてより一般的に、民主主義の問題が科学それ自身にも拡張されるべきだと考える人々に向けられている。」

なんか、フラーの議論なんかとも接点がでてくるんじゃないか。

ちゃんと読めるのは、帰国してからになりそうですが。(中村氏より)

●『アナロジーの驚嘆と眩暈』(Bouveresse)

サイエンスウォーズ関係で、ブルデューの編集するレゾン・ダジュール叢書から、Jacques Bouveresse『アナロジーの驚嘆と眩暈』(すごいタイトルだ。なんて訳せばいいのか……。Prodiges et vertiges de l'analogie)が去年の10月に出版されています。またもや裏表紙によると、

「『科学万能主義』的権力の濫用の一方で、科学の主張することは、それがいったん文学的言語で書きなおされ、「メタフォリックな」—ほとんどすべてを権威付け、弁解すると思われる言葉—かたちで利用されない限り、興味深く深遠なものにはならないと信じることによって成立するようなもう一方の主張(『文学主義』)がある。しかし「メタファーの権利」よりも、もっとも疑わしいアナロジーを慎重さも制限もなく利用する権利—文芸文化、現代哲学の病のひとつに思われる—のほうこそ、検討する必要があるだろう。」

とか。(中村氏より)

●「化学」2000年2月号

新着というには少し時間が経ってしまいましたが、2月号の『化学』が、国立大学の独立行政法人問題の特集しています。

「化学」2000年2月号

どこへ行く? 大学 独立行政法人化によって研究・教育はどうなるか

【これまでの経緯】現実味を帯びてきた国立大学の「独立行政法人化」—議論なきまま行革先行の早急な実施が迫る/編集部

【アンケートで探る国立大学の「独立行政法人化」】研究・教育はどうなるか?—現場の声から/編集部

【国立大学理学部長会議が声明をだすまで】

・埼玉大学理学部長・田隅三生先生に聞く

・国立大学理学部長会議声明(平成11年11月)

【国立大学への提言】

独法化の先行する国立研究機関から/藤本光一郎
ほかに

[論壇] 研究者は感動と共感を呼ぶ努力を/伊藤光男

[座談会] 21世紀の天然物化学者へ

森 謙治・納谷洋子・楠本正一・磯貝 彰など

(梶氏より)

●『技術と文明』

日本産業技術史学会の『技術と文明』11巻2号＝最新号(2000年2月)が手元に到着しましたので、目次を紹介しておきます。

[論文]

森貞彦「19世紀アメリカの機械工業と青写真」(1-18)

John A.H. Evans and Fumihiko Satofuka, "Gunfounding at Tintern Ironworks in South Wales during the latter part of the Eighteenth Century"(19-31)

菅靖子「表象に見る通信技術：1930年代イギリス通信省の「威信」広報政策」(33-55)

[資料紹介]

種田明訳 ウォルフガング・キューニツヒ「技術史する男たち」(57-75)

[寄書]

富田徹男「『工業所有権制度百年史で作成した分類別・特許権者種別特許統計』について」(77-82)

[書評]

橋本敬造「杜石然他編著(川原他訳)『中国科学技術史』」(83-86) (垣原氏より)

●柴田寿子『スピノザの政治思想』

未来社, 2000年2月(本体5800円+税)

副題は「デモクラシーのもうひとつの可能性」となっています。まだきちんと中身を読んではいません。また基本的には研究論文の成果をまとめたもので、かつ政治思想ということでSTSには直接的には関係が薄いかもしれませんが、「科学と民主制」という観点から読み直すことも可能かと思えます。(綾部氏より)

●島尾永康『ファラデー—王立研究所と孤独な科学者—』

岩波書店, 2000.3.10, 2600円、240ページ

広告には「ファラデーは孤独な研究者だった。時代の流れに反して最後まで自然力の同一性を信じた」とあります。(梶氏より)

●『現代思想』2000年2月臨時増刊号「総特集 現代思想のキーワード」

「公共圏」、「カルチュラル・スタディーズ」、「ポストコロニアル批評」、「フェミニズム」、「システム」、「科学論/生命論」に分けて、39項目について各項4ページで担当者が解説しています。巻末に「共通の言葉はあるのか」(岩崎稔+長原豊)、「サンエンス・スタディーズ1950-2000」(野家啓一+金森修)の二つの対談があります。

科学史・科学論に関する「科学論/生命論」の項目では、東京水産大学の金森修さんが総論を書き、「科学的知識の社会構成主義」(金森修)、「STS」(柿原泰)、「サンエンス・ウォーズ」(平川秀幸)、「フェミニズム科学」(高橋さきの)、「死」(小松美彦)、「優生学」(松原洋子)が取り上げられています。

金森さんは、科学についての一定の知識を前提に「科学を対象化して、哲学的な意味での批判をする」科学論

(Science Studies)が、「多様な才能の持ち主の集団的な協力」が必要な分野であり、その専門家が非常に少ない現状から、そこへの多くの人々の参与・参加を呼びかけています。

●中村禎里『生物学を創った人々』

みすず書房, 2000.4, 予価3200円

「アリストテレスにはじまり、ダ・ヴィンチ、デカルト、ビュフォン、ラヴォワジエ、ダーウィン、メンデル、そして、オパーリン、グドールまで。生物学の結節点となる人物25人をそれぞれの探究と発展を、縦軸としての時間の中で関連づけながら示し、横軸としての空間(時代・社会)の中でそれぞれの生物学者が交わした人間としての確執や苦悩を描き出す」(『出版ダイジェスト』2000年3月20日での紹介文から)(梶氏より)

●Fritz Stern, Einstein's German World, Princeton, 2000.

という本が出版されたようです。

書評によると、主としてナチ時代の科学者と政治の関係を、二人の科学者EinsteinとHaber(著者の祖父)を通して描いた歴史書らしいです。ちなみに著者はドイツ史が専門のようですが、歴史家なのか歴史ノンフィクション作家なのかはわかりません。... (調氏より)

アインシュタイン、ハーバー、エルリッヒ、プランクといった20世紀初頭にドイツで重要な役割を果たした科学者を通して描いたドイツ文化史といえます。

著者はドイツ文化史の泰斗で、1943年にノーベル賞を受賞した物理学者オットー・シュテルンのいとこでもあり、ドイツの科学者たちとの交流が深い人だそうで、ドイツ科学史を書くのに打ってつけの人物だとNatureの書評者は書いていました。

この本での主たる登場人物の一人化学者ハーバーに関心があるので買いました。著者はハーバー家との家族づきあいをして、フリッツ・ハーバーは、著者の洗礼の時の立会人(いわゆるgodfather)だったそうです。刊行中のアインシュタイン全集の編集委員の一人でもあるとのこと。(梶氏より)

●●ウェブサイト●●

●『Web現代』で遺伝子に関する特集のシリーズが始まっています。

第一回には隅蔵さんなども登場しています。

<<http://kodansha.cplaza.ne.jp/hot/genome/>>

STS Network Japan 総会報告

3月25日(土)

於)東京大学先端科学技術研究センター

総会において行われたのは以下の四点に関する報告及び承認決議です。

- (1) 99事業報告
- (2) 会計報告
- (3) 事務局人事
- (4) 2000年度事業計画

(1) '99事業報告

- ・夏の学校 99/7/24-26 於)関西地区セミナーハウス
「人文社会とSTS」 参加者36名、報告者15名
- ・ワークショップ 99/7/30 於)東大先端研
「21世紀の科学技術と社会—科学技術政策と新たな産官学関係」 東大先端研、JASTSと共催
- ・スティーブ・フラー講演会 99/7/31 於)同上
「科学の統治：開かれた社会の未来」
- ・秋のシンポジウム 99/11/13 於)同上
「工学教育改革とSTSの可能性」
- ・春のシンポジウム 2000/3/26 於)同上
「エネルギー政策をリスク論から考える—JCO臨界事故の再検証と「不安」の評価」
- ・研究発表会 2000/3/25 於)同上
報告8件
- ・Yearbook 発行
- ・News Letter 発行 4回
99/5/1, 7/1, 10/15, 2000/2/14

(3)2000年度 事務局人事

代表 隠岐 さや香
事務局長 水沢 光
会計 三村 太郎
会計監査 上野 啓介
広報 春日 匠
庶務 隠岐 さや香

文書掛 調 麻佐志 / 野村 元成

夏の学校実行委員長 夏目 賢一

事務局移転特別委員 藤垣 裕子 / 中村 征樹

(事務局が、現在の電通大・小林研究室から、移転するのに伴い、それに伴う作業を行うための委員になります)

(4) 2000年度事業計画についてですが、決議が諮られたのは次の七点です。

1.夏の学校について：

承認された事項)

- ・人事 実行委員長 夏目賢一 副委員長 隠岐さや香
- ・テーマ 仮題「STSの現在」並行してML上でアイデア

募集

承認されなかった事項)

- ・日程 事務局会議にて継続審議 7月の最終週との慣例見直し案

2.シンポジウム春夏二回開催 →承認

3.News Letter四回発行 →承認

4.Yearbook発刊 →承認

今後議論すべき事柄)

Yearbookにシンポジウムのテープおこし原稿を掲載することを恒例化することの検討とそのための予算について。

5.名簿改定 →承認

6.URL取得及びレンタルサーバ運営

承認された事項)

URLの取得。初期費用1万円(初年度のみ)、維持費1万円(毎年)

レンタル・サーバの管理費5万円(いずれも市場価格による若干の変動有り)。

今後議論すべき事柄)

予算確保のための多様な手段(HPにおける広告収入の可能性など)

HPのコンテンツの拡張や管理体制について

7.掲示板公式化について→承認

今後議論すべき事柄)

掲示板とML、及びHPコンテンツの役割分担や性格規定について

複数名によるインターネット広報委員設置の可能性について

また、アナウンスとして以下の事について質疑応答がありました

8.S T S 白書、グロッサリー作成の検討

まだ企画段階ですが、詳細については順次ニューズレター、ML上でご報告致します。

収入

前年度繰越金	127,853
会費	755,500
YearBook売上	141,455
カンパ	50,000
夏の学校残金	75,770
10周年記念パーティ残金	29,820

小計

1,052,545

計

1,180,398

支出

NewsLetter発行費	160,901
YearBook印刷費	315,000
YearBook発送費	56,763
7月WS・セミナー経費	35,460
夏の学校謝金	20,000
秋のシンポジウム経費	14,928
春のシンポジウム経費	13,820
通信費	25,460

小計

642,332

次年度繰越金

538,066

計

1,180,398



編集後記

Newsletter Vol.11, No.1 (通巻No.38)

2000年5月15日発行

編集

STS NETWORK JAPAN 事務局

Newsletter編集委員会

代表 隠岐 さや香 / 委員 春日 匠

発行

STS NETWORK JAPAN

代表 隠岐 さや香

STS NETWORK JAPAN 事務局

〒153-8902 東京都目黒区駒場3-8-1

東京大学大学院総合文化研究科

広域システム科学系

藤垣裕子研究室気付

TEL: 03-5454-6680 / FAX:03-5454-6990

E-mail: office@stsnj.org

WebSite: <http://stsnj.org/>

郵便振替口座 00170-1-63708

加入者名 STS NETWORK JAPAN

(年会費 3,500円)